

特別支援学校教員のメンタルヘルスに関する臨床心理学的研究

—感情労働下における病気休職することなく勤務しつづけていることの意味を探る—

寺脇 朱音

I 問題と目的

1. 教育職員の病気休職者数の推移と特別支援学校教員の病気休職者の現状

近年、教育職員（以下、教員）のメンタルヘルス、特に休職の問題がクローズアップされており、教員の病気休職者数は精神疾患事由を含め、年々増加傾向にある。文部科学省（平成30年度）の「病気休職者（教育職員）の学校種別・年代別・性別・職種別状況」によると、特別支援学校の病気休職者の割合は1.12%、精神疾患者の割合は0.74%と、他の学校種よりも最も高くなっている。休職者は、特に「30代」「女性」「教諭等」が多くなっている。

2. 特別支援学校教員の独自性

特別支援学校の独自性について、個々の子どもの状態に応じた教育課程があること、定期異動や校内配置によって担当する対象者の年齢や障害の状態が前年度と大きく異なる場合もあること、学級担任だけではなく特別支援教育コーディネーターとして地域支援を行うなど外部機関とのかかわりがあること等が挙げられ（坂本ら、2013）、他の学校種の教員と大きく異なる職務を担うことがあり、業務負担もストレス要因の一因とされる。また、特別支援教育におけるストレスを感じる業務に、業務の質、事務的な仕事、学習指導、保護者への対応及び同僚との人間関係が挙げられている（森ら、2014）。さらに、メンタルヘルス不調の背景に、教員間のコミュニケーションや上司・同僚への相談のしづらさを挙げ、複数の教員で対応する事案では、職員との人間関係に加え児童生徒や保護者等との人間関係も相互に影響し合い、一部の人間関係が難しくなると全ての人間関係が悪くなり、トラブルに発展するケースがあると指摘している（文部科学省、2013）。このような人間関係のありようについては、「感情労働」が関わっていることが考えられる。

3. 特別支援学校における感情労働

特別支援学校教員を感情労働者と捉えると、その感情管理をする「管理職者」と「児童生徒・保護者」との三極関係に加え、学級担任として同僚とペアの関係性が生じると考えられる。このような三極関係で生じる感情労働とペア体制ゆえの同僚との関係に苦渋しやすい状況にあるにもかかわらず、精神疾患事由による休職をすることもなく教員を続けている者もいる。

そこで本研究では、特別支援学校教員のメンタルヘルスについて精神疾患事由により休職することなく教員を続けていることの意味を模索することを目的とする。

II 方法

研究対象：各特別支援学校の管理職者を通して依頼し、研究の協力を承諾した4名が対象となった。管理職者以外で教員歴が20年以上あり（40～50代）、精神疾患事由による休職経験がない特別支援学校教員である。研究期間・場所：2020年8月から10月に守秘可能な研究協力者の都合の良い場所にて面接調査を実施した。調査方法：フェイスシート（年齢、性別、家族構成、教員歴）へ記入後、「特別支援学校教員を続けていられること背景」について、予備調査結果から検討されたリサーチクエスション（特別支援学校教員になったきっかけ、人とのかかわりについて感じていること、特別支援学校の独自性において感じていること、教員を長く続けていることについて感じていること）を用い、半構造化面接を行った。分析方法：現象学的心理学者ジオルジ（Giorgi, 2013）が提唱した「記述的現象学的方法」を用いて分析した。現象学的還元によって研究協力者の言葉を研究者の言葉に置き換え、本質を探究し、経験の構造化により現象を記述した（松村、2014）。

Ⅲ 結果と考察

1. 研究協力者の「経験の本質」として見出された一般的心理構造

研究協力者の経験は、個性により差異もあるが、【元々の性格（人への興味関心）】【一人で抱え込まない、何でも話す・伝える】【特別支援学校教員としての生きがい】【未来志向性】の4つの構成要素からなる共通する構造（一般的心理構造）が明らかになった。

研究協力者は、教員以前の障害のある子どもとの出会いの経験から【元々の性格（人への興味関心）】として備わっていたものと認識していた。そのことが自然なコミュニケーションにつながると考えられた。また、職場は相談しやすい環境と実感したり、自己理解・他者理解に努めたりすることによって【一人で抱え込まない、何でも話す・伝える】ことにつながると考えられた。加えて、特別支援学校の独自性を痛感しつつ魅力を感じながら業務にあたっていた（【特別支援学校教員としての生きがい】）。さらに、教員を続けていく中で、多様な視点の獲得や相手の立場を想像すること等、特別支援教育の視点を体感しているため、相手に対し学ぶ姿勢もみられていた。そうした【未来志向性】があることによってストレスはさほど感じなくなると考えられた。

2. 総合考察

(1) 感情労働の視点から

子どものかかわりでは、大塚 (2018) のいう「戦略的」に感情労働を用いていたことがうかがえた。保護者とかかわりでは、保護者の過剰なニーズに応えることに苦渋しつつ、保護者理解に努めていたり、同僚とかかわりでは、「家族以上の時間を過ごす赤の他人」とし、上手くやっていかなければならない存在として捉えていたりしていた。これらは、黒羽ら (2011) のいう「感じている感情」と「感じるべき感情」の不一致が生じていることがうかがえた。

(2) 特別支援学校の独自性から

研究協力者は、特別支援学校の独自性に葛藤しており、坂本ら (2013) のいうように、特に特別支援

教育コーディネーターとして学級担任を外れることが教員のストレスサーになっていることが予想された。その中で、自分の役割の再認識、役に立てればという謙虚な気持ち、外部機関と協働的関係の築きによって、葛藤を乗り越えていたことがうかがえた。

(3) 現象学的心理学の視点から

研究協力者は、松丸 (2015) がいうように、「危機的状況」に直面したときに、その状況においてどのような自己となるかを自分自身の「課題」と受け止めていたことがうかがわれた。そして、自己更新の絶好の契機としていた。

3. 臨床心理学的意義

以上のことから、個性だけでなく共通性（一般的心理構造）についても見出された。また、今回の結果から、教員自らが「危機的状況」を「自己更新のための絶好の契機」と受け止められるような（自己一致の促進、未来志向性の促進）カウンセリングのありようも重要になるのではないかと考察された。

【引用文献】

- 黒羽正見・黒羽諒 (2011). 教師の教育行為に現出する「感情労働」に関する一考察—ある小学校の戦略的行為に着目して—. 群馬大学教育実践研究, 28, 320
- 松丸啓子 (2015). ヤスパースの精神医学の哲学—『精神病理学総論』の意義をめぐって—. 5
- 松村ちづか (2014). 在宅がん終末期療養者の病いの体験—重要他者との関わりを通じて自己の存在可能性をめがけて生きていくこと—. 茨城県立医療大学大学院博士論文, 16(3), 27
- 文部科学省 (2013). 「教職員のメンタルヘルス対策について（最終まとめ）」.
- 文部科学省 (2019). 平成30年度公立学校教職員の人事行政状況調査について.
- 森浩平・岩田路花・田中敦士 (2014). 特別支援教育に携わる教員におけるメンタルヘルス影響要因の検討—雇用形態及び勤務地域に関する分析—. Asian Journal of Human Services, 6, 112
- 大塚弥生 (2018). 対人援助職としての教職に関する考察—「感情労働」の視点から—. 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 15, 93
- 坂本裕・一門恵子 (2013). 特別支援学校教員のバーンアウトへの関与要因についての探索的研究. 特殊教育学研究, 51(3), 261, 264